



TITLE:

ゴルドマンの「賭」の解釈をめぐって

AUTHOR(S):

湊野, 正満

CITATION:

湊野, 正満. ゴルドマンの「賭」の解釈をめぐって. 仏文研究 1979, 7: 123-127

ISSUE DATE:

1979-06-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/137627>

RIGHT:

ゴールドマンの「賭」の解釈をめぐる

渥 野 正 満

パスカル（1623－1662）の『パンセ』は様々な読み方の出来る、又事実されて来た書物である。以下は、そのひとつの試みである L・ゴールドマン（1913－1970）の『パンセ』解釈の一側面に対する批判である。ゴールドマンは著書『隠れたる神』の中で「悲劇的世界観」を提起する。それは合理主義や経験論としての個人主義を超えており、やがて弁証法的思想によって乗超えられるべき思想史的概念として措定されている。ゴールドマンは「悲劇的世界観」によってパンセ全体を理解しようと試みる。この「悲劇的世界観」によるパスカル解釈の中心と言えるところに「賭」（LAF-418）¹⁾の解釈が位置している。小論では、彼の「賭」の解釈に限って言及したい。というのも、ゴールドマンの「賭」の解釈は、先に筆者が公けにした「賭」の草稿の調査結果²⁾及びその指し示すところと相入れぬもののように思われるからである。

我々の解釈によれば、「賭」はその発生の時点では損得勘定により、神の存在や靈魂不滅を信じさせようとする当時ありふれた議論を超えるものではなかった。パスカルはどこかでそれらの議論を読んだり、耳に入れていたであろう。そして、それを利用して、「神を求めねばならぬ」ことを説得する議論を書こうと考えた。この議論は、聖書や教会の権威、教義などに頼ることなく、神を求めなければならぬことを理性によって主張しうるものである（「賭」の初稿）。この簡単な議論が、進化し、発展して、今日我々が『パンセ』中に見出す「パスカルの賭」の名で知られるテキストに成長することは、拙論 <Sur le processus du *Pari*> 中で明らかにしたとおりである。従って、パスカルは、何か特別な個人的体験（例えば、自分自身が神を求めて、見出せぬ時に、この議論を編み出したというようなこと）に基づいて「賭」を書いたわけではない。

他方ゴールドマンの主張によれば、「賭」において、信ずることと賭けることは同義語であり、「賭」は『パンセ』において、まさしくその中心に位置するものであって、パスカルを含めたすべての人間に向けられているものということになる。

そこでゴールドマンがこのように主張する根拠を検討してみよう。しかし我々はその全部を検討する必要はない。ゴールドマンは「賭」及び断章 LAF-577、の検討を

通じて論を展開するのであるが、「賭」と577の前半に関しては、我々の立場（ゴールドマンとは反対に、「賭」は『パンセ』において、その始まりに位置するものであって神を信ずることのできぬ人々に対して向けられている、一言で言えば「賭」は argument ad hominem であるとする立場）も取り得ることを認めているが、577の後半の文章に至って、もはや我々の立場は取り得ないとしている。従って我々は577の後半の文章に関するゴールドマンの解釈を検討し、それがいかに皮相的であり、一面的であるかを示したい。さらに、577の後半が、ゴールドマンの論破しよとする伝統的解釈といかに整合性を持っているかを示すことにより、ゴールドマンの「賭」の解釈に反論することができると信ずる。

まず断章577後半を引用しよう。

Saint Augustin a vu qu'on travaille pour l'incertain, sur mer, en bataille, etc.; mais il n'a pas vu la règle des partis, qui démontre qu'on le doit. Montaigne a vu qu'on s'offense d'un esprit boiteux, et que la coutume peut tout; mais il n'a pas vu la raison de cet effet.

Toutes ces personnes ont vu les effets, mais ils n'ont pas vu les causes; ils sont à l'égard de ceux qui ont déceivert les causes comme ceux qui n'ont que les yeux à l'égard de ceux qui ont l'esprit; car les effets sont comme sensibles, et les causes sont visibles seulement à l'esprit. Et quoique ces effets-là se voient par l'esprit, cet esprit est à l'égard de l'esprit qui voit les causes comme les sens corporels à l'égard de l'esprit.

ゴールドマンは、このテキストがパスカルにとっていかに本質的な問題を提起しているかを搦手から論証しようとする。

[...] lorsqu'on connaît l'autorité hors pair dont jouissait Saint Augustin dans le milieu de Port-Royal en général et aux yeux de Pascal en particulier, on est obligé de se dire qu'un langage aussi catégorique et aussi violent contre certaines positions du Père le plus respecté de l'Eglise et du théologien qui – pour Port-Royal – représentait, en fait, la plus grande autorité après l'Ecriture, ne saurait porter sur un point secondaire et accidentel. Pour que Pascal ait pu écrire les lignes qui terminent les fragments 234 [577 dans l'édition de Lafuma], il devait être convaincu qu'il s'agissait d'un problème particulièrement important. Nous nous trouvons à un des points essentiels et de sa pensée et de l'ouvrage qu'il projetait.³⁾

このようにしてゴールドマンは断章 577 に、又（ゴールドマンのねらいは「賭」にあるのだから）合わせて「賭」の断章に、特別の位置すなわち、パンセの中心を与えようとする。

このように搦手から断章 577 に特別の位置を与えてしまうと、次にはこの断章にこれまで企てられたことのない解釈を加える。577 と『サシとの対話』を同列に扱うというのである。『サシとの対話』において、パスカルはキリスト教を、懷疑論と独断論をいわば弁証法的に包含するものとして考えており懷疑論をモンテーニュ（1533－1592）、独断論をエピクテトス（V 50－125？）に代表させている。そして、ゴールドマンによれば、断章 577 では、懷疑論を同じくモンテーニュに代表させ、独断論の立場を代表するものがアウグスチヌス（354－430）であるという。そしてこの断章において、

Pascal reproche ainsi en termes d'une dureté exceptionnelle à Saint Augustin de n'avoir pas vu le caractère *fondamental* de l'incertitude dans l'existence humaine et d'avoir ignoré la «règle des partis» qui démontre qu'on doit travailler pour l'incertain.⁴⁾

La règle des «partis» [...] démontre «qu'on doit» travailler pour l'incertain seulement dans la mesure où elle concerne la condition humaine comme telle, la recherche nécessaire du bonheur et l'impossibilité d'établir cette recherche sur une base ferme et non paradoxale. Un solitaire certain de l'existence divine pourrait à la limite nier la nécessité de travailler pour l'incertain.⁵⁾

このようにして、ゴールドマンは、パスカルが確率の法則なしには神を信じられぬものであり、彼にあっては信ずることはすなわち賭けることであるから、「賭」は特定の人々に向けられたものではなく、実はパスカル自身をも含む人間すべてに向けられた議論であると結論するのである。

以上が「賭」をめぐるゴールドマンの解釈の要点である。ゴールドマンは、この解釈で、二つの大きな過ちを犯している。

まず第一は、断章 577 がパスカルにとって本質的な問題を提起していると考えている点、及び、その論証方法である。

第二に断章 577 を独断的に『サシとの対話』に結びつけていることである。

ところで断章 577 がパスカルにとって本質的な問題を提起していると考えればこそ、『サシとの対話』とも結びつけられるのであろうから、ここでは第一の過ちを究明すれば十分であろう。それには断章 577 がパスカルにとって本質的な問題を提起していることを論証するゴールドマンの議論を再点検することだけで事足りる。

断章 577 が、パスカルにとって本質的な問題を提起しているというゴールドマンの主張の根拠は、比類なき権威を持つアウグスチヌスのある立場に対するかくもはっきりとした、かくも激しい言葉は、二義的で偶然的な点を対象としては述べられないので、パスカルが特別に重要な問題に関わっていることを確信しているはずであり、従って我々はパスカルの思想と護教論の本質的な問題を前にしているということである。このゴールドマンの主張では、推測が主要な役割りを果している。ゴールドマンは、パスカルにおける「権威」と「理性」の問題を十分に理解していなかったもので、このような、あやまった推論におちいったのであろう。

パスカルは『真空論序論』において「権威」と「理性」を明確に区別している⁶⁾。すなわち「理性は『実験と推論の領域に属する』事柄の認識に適用され、権威は『単純な事実、もしくは人間または神によって樹立された制度をその原理とするような』事柄の認識に適用される」⁷⁾のである。このような権威観が『プロヴァンシャル』、『パンセ』を通じて存在し、とくに彼の企てていた護教論の要となるはずであったことは、塩川徹也氏の研究によって明らかにされている。

ところで断章 577 において、アウグスチヌスが知らなかったとパスカルの主張しているものは「分け前の規則」である。これは、パスカルが発見した彼の数学上の業績のひとつである。これはけっして「単純な事実もしくは、人間または神によって作られた制度をその原理とするような事柄」ではなく、「推論の領域に属する事柄」である。故にアウグスチヌスの権威は、ここでは問題とはなっていないのであり、又「分け前の規則」をアウグスチヌスが知らなかったと言ったところで、少しもアウグスチヌスの権威を傷つけることにはならないのである。「分け前の規則」は信仰上の問題に関しては、むしろ二義的で偶然的なものである。「分け前の規則」は信仰を持たぬ人々にとってのみ効力を持ちうるのである。

以上、断章 577 において、我々がパスカルの思想と彼の企てていた作品の本質的な問題のひとつの前にはいるのではないことが明らかになった。従って断章 577（及び「賭」）が本質的な問題を提起するものとのゴールドマンの主張は、その根拠を失なった。

(注)

- 1) 『パンセ』からの引用は、ラフュマ版パスカル全集中の『パンセ』の番号によって示すが、テキストは自筆原稿写真版に直接準拠した。
- 2) < Sur le processus du *Pari* de Pascal > in « Etudes de Langue et Littérature Françaises » No. 34, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 1979.
- 3) L. Goldmann: *Le Dieu caché*, N.R.F., 1959, p. 320.
- 4) *ibid.* p. 321.
- 5) *ibid.* p. 322.
- 6) 塩川徹也氏の「パスカルにおける『権威』の問題」(現代思想 1977年9月号)に啓発され以下の論述を思いついた。
- 7) 塩川徹也, 前掲書 p. 171.